

ゲオルゲ・クライスの『精神運動年鑑』（3）

松 尾 博 史

松 山 大 学
言語文化研究 第35巻第2号（抜刷）
2016年3月
Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 35 No. 2 March 2016

ゲオルゲ・クライスの『精神運動年鑑』（3）

松 尾 博 史

は じ め に

『精神運動年鑑』第3巻¹⁾はフリードリヒ・グンドルフとフリードリヒ・ヴォルターズの編集により、1911年11月20日前後²⁾にベルリンの芸術草紙社を出版元とし、オットー・フォン・ホルテン社を発行所として出版された（表紙には出版年として「1912」と表示されている）。第2巻まで³⁾と異なり、第3巻には6頁にわたる長文の編集者序文が付されている。構成は以下である。

	「編集者序文」	iii-viii	6 頁
フリードリヒ・グンドルフ	「模範」	1-20	20 頁
カール・ヴォルフスケール	「音楽の精神について」	20-32	12 頁
エルンスト・グンドルフ	「アンリ・ベルクソンの哲学」	32-92	60 頁
エーリヒ・カーラー	「劇場と時代精神」	92-115	23 頁
クルト・ヒルデブランドト	「ロマン的とディオニュソス的」	115-131	16 頁
パウル・ティアシュ	「アテネのベルリン芸術」	132-134	3 頁
ベルトルト・ファレンティン	「ナポレオンと精神運動」	134-138	4 頁
フリードリヒ・ヴォルターズ	「人間と属」	138-154	16 頁

1) Jahrbuch für die geistige Bewegung. Hrsg. v. Friedrich Gundolf u. Friedrich Wolters, Blätter für die Kunst: Berlin 1911. 以下、同書からの引用は文中に（JB III-**）として**にページ数を示す。

2) H.-J. Seekamp; R. C. Ockenden; M. Keilson: Stefan George. Leben und Werk. Eine Zeittafel. Castrum Peregrini: Amsterdam 1972, S. 229.

3) 第1巻については、拙著「ゲオルゲ・クライスの『精神運動年鑑』（1）」松山大学『言語文化研究』第25巻第2号、2006年、113-143頁、第2巻については、同「ゲオルゲ・クライスの『精神運動年鑑』第二巻-Gestaltの概念を中心に」上智大学ドイツ文学会『上智大学ドイツ文学論集』第51号、2014年、33-59頁を参照のこと。

第2巻まではカール・ヴォルフスケールの論文が巻頭を飾っていたのに対し、第3巻では編集者であるフリードリヒ・グンドルフの論文が巻頭に掲げられている。巻末を占めるのはこれまでと同じくヴォルタースの論文である。このことは、編集者序文と相まって、ゲオルゲ・クライスの主導権が、ゲオルゲと同世代であるヴォルフスケールから、グンドルフ／ヴォルタースを中心とした若い世代に移ったことを対外的にも示すものである。42歳のヴォルフスケールを除くと、執筆者の平均年齢は30.8歳、最も若いエーリヒ・カーラーは博士号を取得したばかりの26歳の学徒であった。

以下、編集者序文、F.グンドルフ「模範」、K.ヴォルフスケール「音楽の精神について」、F.ヴォルタース「人間と属」について論じたのち、第3巻で『精神運動年鑑』が終刊するに至った経緯について考察を試みる⁴⁾。

4) エルンスト・グンドルフのベルクソン論についてはリースマン (Rißmann, Michael: Literaturgeschichte als Kräftegeschichte. Friedrich Gundolfs Beitrag zur Methodik geistesgeschichtlicher Literaturbetrachtung. In: Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft. Bd. 42/1, 1997, S. 63-105.) およびエジプティーン (Egyptien, Jürgen: Versuch über Ernst Gundolf. Beobachtungen zur Kunst des Verschweigens. In: Gundolf, Ernst: Werke. Herausgegeben, eingeleitet und kommentiert von Jürgen Egyptien. Castrum Peregrini: Amsterdam 2004, S. 5-39, besonders S. 18ff.) が詳しく論じている。

エルンストの兄であり『精神運動年鑑』の編集者だったフリードリヒ・グンドルフは1909年、ゲオルゲの求めに応じてベルクソンの著作を送ったことをきっかけにベルクソン哲学に接することとなり、やがて熱狂的なベルクソン信奉者となった。ベルクソンの影響は、『年鑑』第2巻のフリードリヒ・グンドルフの評論「本質と関係」にも見て取れる。「あることを本質 *wesen* として捉ええない者は、関係 *beziehungen* によってそれを表現することは決してできない。有機的なものは原子によって、生は個々の出来事によって、作品は素材によっては表現されない。生けるものの中心にはそれぞれ一回的なものがある。この中心を体験しないものは、外から内へ、いかに集中して層を一枚一枚剥がしていても、決して本質的なものを経験したり意味づけたりはできない。」(JB II -26) 同じような認識論は、ベルクソンにも見出せる。「ベルグソンによれば、従来の哲学者たちは、その外見上の相異にも拘らず、事物を認識する仕方に二つの根本的に異なる方法を区別する点において一致している。その一つは事物のまわりをめぐる仕方であり、他のものは事物の中へ入って行く仕方である。第一の仕方すなわち外からものを眺める認識の仕方は、当然それが如何なる観点に立つか、また如何なる符号によって表現するかということに依存するけれども、第二の認識の仕方はそのものの中へ入って行くのであるから、観点の相異には拘らないし、また如何なる符号にも依存しない。第一の認識は相対的なもの (*le relatif*) にとどまるけれども、第二の認識は—それが可能な場合には—絶対的なものに達する、とベルグソンはいう。」(淡野安太郎『ベルグソン』(思想学説全書) 勁草書房 1966⁴⁾, S. 44)

1. 編集者序文

「編集者序文」は、進歩主義を批判し、循環的視点を対置するという導入部に続く、すべてコロンで区切られた第一文をトピック・センテンスとする10の段落によって構成されている。以下、そのトピック・センテンスを《…》で引用しつつ、編集者の主張を要約する。

進歩主義は存在したものをすべて来たるべきものの前段階と見なし、直線的な進歩の果てに終末、破滅を想定する《悲観主義》である。それに対して、ゲオルゲ・クライスは転換 *eine umkehr* が今世紀中にも起きることを期待している。ただ、《今日の世界状況とはもはや折り合うことができない》という悲観論的予感と嗅覚は、時代の真正の感覚であり、「この感覚に対すると、虚無の上にな何を築こうとするすべての希望は、すでに絶望的に感じられる。」（JB III - iii）現在の学問はその救いにはならない。「学問は世界をわがものにせんと望むため世界を認識し、知（真実）と有為（有益）として整序せねばならぬ生の営みの

ベルクソン哲学の中心的概念である「時間の持続」*Dauer* を敷衍し、フリードリヒは「生成」*Werden* をその歴史把握の中心概念とした。そのことをゲオルゲは批判する。「生成の状態というのは、概念ではない。人は自らを生成するもの *werdend* としてではなく存在するもの *seiend* として感知する。」（Landmann, Edith: *Gespräche mit Stefan George*. Küpper: Düsseldorf; München 1963, S. 39f.）ゲオルゲにとって重要だったのは、「生成ではなく、無時間的な存在それ自体 *die zeitlose Existenz an sich* であった。時間の本質は、ゲオルゲによれば、『生成』にあるのではなく瞬間の『秘義』に属しており、しかしそれは定義不可能だとされる。ある特定の瞬間に『生の無限なるもの』*ein Unendliches an Leben* が集約するということである。」（Rießmann: a. a. O. S. 78.）グンドルフがベルクソンに依拠してゲーテ論を構想するのを阻止するために、ゲオルゲは、グンドルフの弟のエルンストに、『精神運動年鑑』に論文を書き、そこでベルクソンを「正しい位置に移動させる」（Vallentin, Berthold: *Gespräch mit Stefan George 1902-1931*. Castrum Peregrini: Amsterdam 1967, S. 96.）よう指示した。フリードリヒは弟のベルクソン論に同意し、ベルクソンの影響下で構想していたゲーテ論を改稿するに至った。「エルンスト・グンドルフの論文の明らかな目的は、ベルクソンの世界把握の根底にある永遠の生成の原理 *das Prinzip des ewigen Werdens* に対抗し、その代わりに、プラトニズムによって鍛えられた、持続する理想に依拠する、人間の魂と世界の完璧性 *Integrität der menschlichen Seele und der Welt* の把握を主張することであった。」（Midgley, David: “Schöpferische Entwicklung” Zur Bergson-Rezeption in der deutschsprachigen Welt um 1910. In: *Scientia Poetica. Jahrbuch für Geschichte der Literatur und der Wissenschaften*. Bd. 16, 2012, S. 12-66, hier S. 53.）

作用である。(しかし)知と有為という二つの目標は今日、その創造的な起源から分離され、もはや生に奉仕しないどころではなく、生を頸木^{くびき}につける。」ここから《学問の軽視》が生じる。「われわれには当然このような学問を軽蔑するのみならず、力の限りを尽くして戦う権利がある。」(JB III-iv) ショーペンハウアー、ブルックハルト、ベックリン、ニーチェおよびロダン⁵⁾は進歩に敵対し、進歩の犠牲となった。進歩の時代は《偉人と「偉業」の無視》をもたらしたのである。この全知の時代は、完全に平板で、真の知の全てから完全に疎遠になってしまっている。そもそも人間性 *humanität* とは「集合主義的でドグマ的な束縛から人間を解放し、円満な人間的教養を獲得せんとした時代の理想であった。」しかし今日見られるのは《人間性の誤解》である。今日の人間性は「あらゆる任意の人間のありかたを良しとし通用させることから生まれており、このことが凡庸なもの、すなわち価値を顧慮せぬ数の支配をもたらしている。国家は弱者 *die schwachen*、身障者 *die krüppel* を保護しようとし、そのことで人間全体の弱体化と障碍化 *eine verschwächung und verkrüppelung* を招き、奴隷制度を禁じるが、誰しもが奴隷となるよう奨励している。」(JB III-v) 抑制なき進歩、無法な人間性、受動的自由の産物として大衆は生まれた。しかし人口の増大と迫りくる物質的困窮のみを脅威とするのは《大衆の誤解》である。最悪なのは「大衆とともに常に増大する種の悪化 *artverschlechterung* である。(中略) この過剰は(中略) 毒と炎によってのみ癒やされねばならない侵食性の異常成長 *fressende wucherung* と見ることができると、語る勇気を持つものは誰もいない。」(ebd.)

この段落で語られている「種の悪化」「毒と炎によってのみ癒やされねばならない侵食性の異常成長」という表現には、大衆への嫌悪と敵意が、種の退廃への恐怖とその治癒のための暴力的な浄化願望へとつながっていく経緯が見て取れる。『盟約の星』の第14詩⁵⁾に通じるものだが、それが詩ではなく評論と

5) 「一万人を聖なる狂気が撃たねばならぬ／一万人を聖なる疫病が攫わねばならぬ／一万人を聖なる戦争が。」1913年に私家版で刊行された『盟約の星』のこの詩は、第一次世界大戦を予言したものと解釈された。

いう形式で論じられているだけに、問題だと言わざるを得ないだろう。

問題的な発言は次の《女の軽蔑》でさらに続く。モダンガール *die moderne frau* は「あらゆる進歩的非歴史的な、平板で人間的な、浅薄で理性的な、浅薄で宗教的なイデーの最も忠実な尖兵だと非難され、「民族の女性化」は重大な社会的危険だと警告される。かつて女性たちは「驚嘆すべき行動や精神的英雄」をもたらすことができたが、「この本質を喪失し、乖離され、反映された性 *das entsubstanziierte, losgerissene, reflektierte geschlecht* から偉大な男が生まれることはもはや決してあるまい。」女性の価値は精神的英雄や偉大な男を産む性としての役割におかれており、進歩的で解放された女性としてのモダンガールは脅威と見なされている。この一節は、後述するヴォルタースの「人間と属」におけるモダンガール批判と相まって、ゲオルゲ・クライス周辺の女性知識人からの憤激を呼ぶことになった⁶⁾。

他方、男性同盟であるゲオルゲ・クライスは《友情の崇拜》に「全ドイツ文化の形成の本質を見出すことができる」と信じる。この友情が「魔女の鉄槌的法律の条項、児戯的な医学的整理」と関係があるか彼らはあえて問おうとはしない。ただ、「この愛^{エロス}がなければどんな教育も単なる仕事あるいはおしゃべりであり、それゆえにより高次な文化への道は閉ざされる」（JB III-vi）と彼らは見なすのである。肉体的同性愛との差異を示唆し、ダンテ、シェイクスピア、シラー、ゲーテ、ジャン・パウル、シュレーゲルを引合いに出しつつ、編集者は「男性的な愛」が「英雄化された愛の形式」であると主張する。

序文の末尾部分では、宗教と近代社会に対する批判が展開される。マック

6) この序文を書いた編集者フリードリヒ・グンドルフが、後年、ゲオルゲがモダンガールの典型として唾棄したエリザベート・ザロモンとの結婚のため、ゲオルゲと決別するに至ったことは、皮肉である以上に、男性同盟にとってモダンガールが現実的な脅威であり、攪乱要因であったことを示している。モダンガールに対する過剰な敵意は、彼らが抱いた恐怖心の裏返しである。ヴィルヘルム時代からワイマール期にかけての保守的男性の女性恐怖については Theweleit, Klaus: *Männerfantasien*. Roter Stern: Frankfurt a. M. 1977-78. クラウス・テーヴェライト（田村和彦訳）『男たちの妄想』法政大学出版局 1999, 2004 に詳しい。

ス・ウェーバーに依拠しつつ、リベラルで市民的で功利的な発展の前提となり、資本主義と密接なつながりがあるゆえに、プロテスタンティズムは拒否される。しかしカトリシズムも今日ではプロテスタント化する傾向があり、「永遠なる生命に満ちたもの、異教徒的な原理の保持というその偉大なる使命をもはや果たしていない。」(JB III-vii) プロテスタント的キリスト教形式が導入されたところではどこでも、民衆は資本主義化、産業化、近代化される。反文明的な「カニバリズム、人身売買、異端審問、専制政治ですら、今日促進されている『文明の賜物』ほどには、人間性全体にこれほどの傷は与えなかった」(ebd.)と編集者は主張し、敢えて《カトリック化の傾向》を唱道しようとする。

しかしゲオルゲ・クライスは《時代の宗教的な憧憬に対しては盲目》である。「この憧憬は、それが完全に個人的もしくは文学的であるがゆえに、本来まったく宗教的ではなく、したがって不毛にとどまる」からである。今日宗教的なものが何に対しても手を伸ばそうという傾向があるが、それはキリスト教のスラブ的形式であり、東方的なものが全てそうであるように、とどめるもの、築き上げるものを一切持たなかったがゆえに、自らを保持することも、自らを西欧に伝えることもできなかった。(JB III-viii)

最終段落は《なぜ朽ちた建物が自壊するまで待たないのか?》という問いで始まる。それは「われわれが今日でも、台無しにされえなかった古^{いにしえ}からの実体の名残が保たれていると信じている」からである。「その実体の実効化する最後の時点はもちろんそこにある。」第二段落で述べられていた転換の希望が想起されている。しかしその希望の実現は今後の闘いにかかっている。「さらにこれから50年間にわたって進歩が継続すれば、古の実体の最後の残滓も消えてしまうことであろう。進歩の恥辱を帯びているもの以外の何物もこの世に与えられず、交通、新聞、学校、工場、兵営を通して都会の進歩の感染が世界の遙か果ての一角まで押し寄せ、悪魔的に倒錯した、アメリカ的世界、蟻の世界が最終的に打ち立てられるのであれば。」序文は、「オルムツド Ormuzd のアーリマン Ahriman に対する、神の悪魔に対する、世界の世界に対する戦い」

（ebd.）への呼び掛けで終わっている。

2. フリードリヒ・グンドルフ「模範」

『年鑑』第2巻の巻末論文「^{ゲシュタルト}形姿」でフリードリヒ・ヴォルタースは全体論的に「形姿」の表象とその受容体験について論じた。このテーマは、第3巻に引き継がれ、フリードリヒ・グンドルフの論文巻頭「模範」Vorbilderにおいて、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテという三人の「偉大なる人間」を新たな「模範」として形象化する試みとして展開される。この詩人論は、のちにアレクサンダー、シーザー、ナポレオンという三人の英雄論を加えて、評論集『詩人と英雄』⁷⁾の中心的論文へと拡張され、ゲオルゲ・クライスから以降陸続と出版されることとなるゲシュタルトのモノグラフィーの雛形となる。

冒頭、グンドルフはあらゆる運動が、それを通してその運動が成立し作用する「現在の諸力」die gegenwartskräfteのみならず、歴史から特別に選択したものによっても形作られると宣言する。運動の現在の指導者の^{ゲシュタルト}形姿と意志のみによってではなく、運動の中にいまだ生きていて現在もその力となる過去によって、運動は際立つのだとされる。（JB III-1）指導者であるゲオルゲだけでなく、過去のどの偉人を模範とするかが、「精神運動」にとって決定的な重要性をもつと述べていると解釈されよう。

グンドルフは、偉人と、その受容者の相互作用を強調する。自然と現在がそうであるように、歴史と過去も、観照し受容するだけでなく、選択的に作り替える wählerisch umschaffen ために存在する。過ぎ去りしものを力となすものにとって大切なのは、実りをもたらしてくれるもの、力を呼び起こしてくれるも

7) Gundolf, Friedrich: Dichter und Helden. Weiss'sche Universitätsbuchhandlung: Heidelberg 1921. なお、拙論執筆に際しては3冊の翻訳書、グンドルフ（小口優訳）『グンドルフ文藝論集』木村書店1934年、（同訳）『英雄と詩人』富山房（富山房百科文庫111）1940年、グンドルフ（橘忠衛訳）『英雄と詩人』櫻井書店1943年、を参照したことを、ここに謝意とともに記する。

の、生の感覚を昂めてくれるものである。(JB III-1)「その現在の中へと英雄 die heroen を覚醒させ続け、自らの現実存在のなかに組み換え、英雄から受け取った放射を新たな形象に変容させることが、あらゆる生ける運動の義務である。運動はその際自ら — そうせざるをえないのだが — 選択と形成を行い、運動の本質に従い、運動の必要から、運動の作品のために模範を創造 schaffen する。」(JB III-2)

偉大なる人間 der grosse mensch は、その下でわれわれが神的なものを経験する最高の形式である。最も偉大な思想は全て、人間の中に、人間を通して、人間から存在するからである。(JB III-2f.) 偉大なる人間は作用することを求める、すなわち偉大なる人間は変容させずにはおかず、その放射と種子の受容者であるわれわれを作り変える umbilden ことによって、形成しつつ変容し gestaltend umgestaltet, 自らを作り変える。歴史とは、創造的人間と受容の人間の相互作用に他ならない。(JB III-3) 偉大なる人間の崇拜は宗教的であるか、それとも無価値かのいずれかである。偉大さ das Grosse は要求、尺度、中心である。自らをその核心で作り変えしめる者のみ�がそれに接近することを許される。(JB III-5) 全人格を変容せしめないもの、人間を創造しえないもの、対象にとどまるものは不必要である。美しく大いなるものがもはや何も生殖 zeugen しないのであれば、もはやそれに対する権利はない。いまだ美しく大いなるものが生殖することによって、われわれは生きる。(JB III-6)

以上のように、偉人の影響のもとで受容者が変容し、生殖ともいえるその影響下で偉人を現代に新たに創造し、蘇らせることが、精神運動の目標である。
ゲシュタルト
形 姿の評伝は、そのための活動の一環であり、運動の中核をなす営為なのである。

続いてグンドルフは神的なもの与人間的なものの関係性を軸とする歴史的考察に移る。古代においては、全体 eine gesamtheit を代表するか神的なものを顕現することのいずれかによってのみ偉大なる人間は崇拜された。古代の破壊者、転覆者は神々をもたらずか神々とならねばならなかった。人格崇拜

personen kult の唯一可能な形式は神化 vergötterung だった。(JB III-8)「キリスト後の時代においては偉人には古代とは異なる使命がある。肉体と魂が分裂し、神的なものが人間から乖離し、人間を超えた彼方に置かれて以来、人間の営為は神聖なるものとの合一をその目的とするようになった。自らをもはや神的だとは感じなくなり、魂は神を己自身から放射したり己の中に表現する代わりに、神へ近づこうとしたり自らへ引き寄せようとする。かのキリスト教的な葛藤を自らの中で止揚し、肉と魂の統合 synthese を表現し、全人的なもの das gesamt menschliche, 宇宙的に調和のとれた人間 der kosmisch runde mensch, 神性の最上の目に見える象徴を実現する人間は、極くごく稀にしか存在しなかった。」(JB III-7) さらに「近代にいたり、王国と教会の全^エキ^クリ^メス^ニト^ツ教^シ的^ユな統一が崩壊した後には、代表的な使命と宗教的な使命にさらに第三の、統合的ともいえる使命が英雄には課されることとなる。特定の英雄において文化的統一 die kultureinheit がふたたび生み出される。全文化 gesamt kulturen に代わって、自らの中に文化があり、自らを巡って文化を創る人間が、表現と肉体がなければ混沌に留まるしかない衝動と素材のために、表現と肉体を創る人間が現れる。この人間において言葉は肉体となり、本質は形姿となる。」(JB III-8) 今や全人 der gesamt mensch が全体のために必要となる。彼は自然と文化をその作品もしくはその本質を通じて統一せねばならない。要するに全人性 gesamt mensch tum を自らのなかで更新しなければならない。(ebd.)

グンドルフの見るところ、ドイツでは今、全てが流れ去り、分岐し、脳または衝動の混沌に破裂し、何ものももはや有機的に成長せず、単に機械的・恣意的に無理やり寄り集められ、官僚的に整序されている。今日文化を救ってくれる者は形式をもたらししてくれる者である。内実 gehalt と力 gewalt はドイツ人にはほとんど欠けたことがないが、形姿 gestalt はほぼ常に欠けていた。今日においても、そしてまさに今日においては、ドイツ人にとっては三人の^{コスミツシユ}宇宙的人間が誰にもまして不可欠な締結者 binder にして形成者 bildner であると述べ、グンドルフはダンテ、シェイクスピア、ゲーテの名を挙げる。(JB III-9)

ダンテは硬直した世界を新たな始原的魂 Urseele によって貫き、手探りし分裂してゆく人間性のために、不動の節度の感覚と揺らぐことのないリズム、建築性、形式と形象を創り、人間性に様式を、少なくとも様式そのものへの可能性を保証することが如何なることかを示している。ダンテとその作品では肉体と精神の統一が、全教会的な結びつきと個人的な自由の統一が到達されている。(ebd.) 彼は全キリスト教的諸力から受け継いだ建築的な世界感情をわれわれのために生き生きと保ってくれる唯一の人間である。(JB Ⅲ-11) ダンテなくしては、「コスモス」、すなわち全存在の完成した不易の法則的秩序の観念は、形姿も限界もない世界に取り巻かれている今日の人間の生の感覚から失われていただろう。コスモスとしての世界を今なお（単に思考したり思い描くだけでなく）体験することを、中世の世界感情を保持する形成者ダンテは、何にもまして可能にしてくれる。ダンテのコスモスは全人的であり、彼においてのみカトリック的コスモスは新たな人間感情に貫かれている。(JB Ⅲ-12)

ダンテが打開したことは盛期ルネサンスの役に立ち、それにより完成されることとなった。全面的に表現が可能となった人間の征服に、現世性の征服が続いた。(JB Ⅲ-13) ダンテが創造したものの中で新しいもの、人間だけをルネサンスは見、受け継いだ。人間が今や中心となり自己目的となった。神は人間を創造したことによってのみ重要とされた。ふたたび全人的なるもの *das gesamt menschliche* は危険に晒される。神と世界、肉と精神、地上と天国の対立に代わって新たな対立が現れる。世界と人間、事物と人物、対象と主観の対立である。追求すべき課題は現実の人間化となった。この新たな課題を解決したのがシェイクスピアである。ダンテが神的なコスモスと人間的な自我との統合を果たしたように、シェイクスピアは事物の世界と人間的な人格の統合を果たした。(JB Ⅲ-14f.) 彼は世界の人間化の完全なる模範である。彼はわれわれのために人間と世界の統一を他の何者にもまして体験の中に救い上げた。彼がいなければわれわれはこの統一について知り、考えることはできても、それを体験するのは難しかったろう。(JB Ⅲ-16)

カトリック的コスモスから人間を解放した後、ルネサンスにおいて世界は自立した。しかし17世紀に至ると、かつて人間がそれでもって世界を征服した手段と道具が独立した。17世紀以来精神がそれでもって殺到する大量の経験を掌握しようとした手段と道具、なかなずく数学が、人間を捕らえ、生命全体が数学的法則の応用ないし証明手段へとほとんど萎縮するほどに力を及ぼした。手段が唯一の現実となり、少なくとも世界と人間との間に科学のヴェールが引かれ、人間はもはやこのヴェールを超えて行くことはできず、人間はこのヴェールを世界として、存在そのものとして受け取るようになった。それが合理主義の兆候である。(JB III-17) 新たな統合、今度は三重の統合が必要になった。全人的なるものが、精神と科学と混沌たる現実の三つに分裂されたからである。この統合を果たしたのがドイツ人における唯一の全人であり最初の形成者 *Gestalter* であるゲーテだった。彼にとって精神は単なる認識の手段ではなく、デモニッシュで測りがたい生の根底の果実であり光であった。人間の認識手段としての合理主義の織物をゲーテの若い炎は焼きつくし、考えられたものの全ての中に彼の血は浸透し、それを自らの精神へと変容させた。これが彼の統合の業績のひとつである。合理主義、自己目的としての科学と認識に対して、ゲーテは全人をわれわれのために模範的に実現した。(JB III-18) そして人間化によって合理的な中間世界を直接に混沌たる世界と対立状態に置くことによって、後者を人間化したことが彼の第二の業績である。実質なき秩序である合理主義と、秩序なき実体である混沌(シュトルム・ウント・ドラング)という、二つの相前後して殺到する抵抗にゲーテは勝利せねばならなかった。両者ともに彼は成功した。二つの使命を彼は前後してではなく、お互いの中において解決した。(JB III-19) 全人となるためにゲーテは科学と芸術と享楽と仕事の全てを実行した。ドイツ人の中で彼は形成し、形成された人間そのものであり、全人的表現としての教養の創造者である。(JB III-19f.)

最終段落は次のように締めくくられる。「ダンテが神の法を、シェイクスピアが直接的現実を形成したように、ゲーテは媒介された現実を人間のうちに

形成した。形成者であることによってこの三者は解放者であった。単なる素材だったものを彼らは精神化し、単なる精神だったものに彼らは肉体を与えた。常に新たな混沌である生に彼らは形姿を与え、形成から新しい生の力を放射させた。彼らの不滅の本質を絶え間ない転変に組み入れ、絶え間ない分裂の最中で失われえない全体として作用しつつ。」(JB III-20)

以上のように、歴史的展開の中で、それぞれ三人の形姿が全人 *gesamtmensch* として称揚されているのだが、興味深いのはダンテの項で開陳されているグンドルフの歴史観である。

ある時代のたったひとつの中心において統合が成就しさえすれば、その時代は豊穡であり世界史的であり、その中で自足し、形成されている。というのは世界史で重要なのは何が実行されるかであり、可能な限り多数の個々人の幸福や価値などは問題ではなく、大事なものは、その中で円熟し、永遠的で、現実的なもの、すなわち可視的な肉体となった神的なるものが成立することである。他の全ては神的なるもの、神を内包した中心のために素材ないし道具として奉仕し、消費されればよい。神的なるものたちからのみ、そして神的なるものを通してのみ、他の全ては間接的に意味と価値を得る。神的なるものたちからのみ種子と生は流れ出、種子と生は彼らを目指し押し寄せる。(中略) 不死なる者たちは、消費する素材をしばしば残酷に変容させることで自らの永遠の生の中で保持することによって、素材に報いる。不死なる者たちは、音もなく堕ちていかねばならなかった形なき数百万の者たちの消え去った願望、祈り、思考、行為を全て救うのだ。全ては不死なる者たちに向かって成長する。(JB III-9f.)

かつてフリードリヒ・グンドルフは「臣従と弟子」で弟子の覚悟についてこう語っていた。「魂を形成する中心がふたたび空気と空間をみいだすことこそ彼らの野心である。彼らは自らが素材、手段に過ぎないことを知るべきであり、

ふたたび犠牲となることを学ぶべきである。人々は彼らを取るに足らないとして一笑に付すことだろう。しかし彼らは最高の象徴を想起することができよう。⁸⁾「臣従と弟子」で称揚されていた師と弟子の関係が、「模範」では偉人と、その他のあらゆる同時代人の関係に拡張されている。

3. カール・ヴォルフスケール「音楽の精神について」

この評論はもともとは『年鑑』第2巻のために執筆されていたのだが、ヴォルフスケールのインド旅行のために中断され、帰国後に脱稿し第3巻で発表された。

この評論でヴォルフスケールが標的とするのはヴァーグナーである。その背景には、死後なお「総合芸術」である楽劇の創始者として影響力を振るうヴァーグナーに対してゲオルゲ・クライスが抱いた畏怖と、芸術の覇権をめぐる抗争がある。「音楽は一世紀以来議論の余地のない中心点であり、われわれのもとでは芸術活動と享受の全内容である。音楽からロマン主義とロマン主義がその結果もたらしたものは芸術の教え、まさに最奥の世界認識を得ようとした、そして今日においては一人の巨匠音楽家の強力な作品の力が、最後のほとんど宗教的でさえある絶頂を点火することができ、その絶頂の中で古いヨーロッパはいまいちど燃え上がるのできたのである。」（JB III-25）

そう認めつつも、ヴォルフスケールは「音楽においては、造形芸術や文芸を生に組み込んでいるような、いかなる諸力も活動していない」（ebd.）と切り捨てる。詩と造形芸術に「視覚的なもの」としての共通項を認め、それに対して音楽を全ての芸術から孤立した特殊なものとして排除しようとしたのである。

まずヴォルフスケールは造形芸術と文芸を、形成された肉体 *gestalteter leib*,

8) Gundolf, Friedrich: Gefolgschaft und Jüngertum. In: Blätter für die Kunst, 8. Folge, 1910, S. 112.

形成された言葉 *gestaltete sprache* と呼び、その内容を肉体の自己呈示および言葉の自己呈示とし、その本質は神像と讃歌であるとする。「その頭がいよいよ高く、その腕がより包括的になり、その眼がより広範になればなるほど、彼はただ神を探し、ただ人を見出しうる。というのは人間性にとっては第一の最も内的で最も直接的な体験は宗教的体験、すなわち神的なものの人間化 *menschwerdung des göttlichen* であるからだ。」(JB III-20) この秘儀は「創造する者の創造力—ミクロコスモス的なもの—が人間的にマクロコスモス的な総体的力に組み入れられることによって」生じる。それは「作品、生ある形姿へと向かう形成物が、特殊なもの、それ自身のために存在するものとなり、王国 *reich* へ、人間的でありしかもこの(経験的な)世界のものではないもの、欲せられ、しかし真正なる世界へ踏み入る」ことであり、それをギリシア人はカイロス *kairos* と呼んだ。形式が実質となり、形象が象徴となるこの超越 *übergang* は、ファウストの「最高の時」であり、ニーチェの「第七の孤独」である。(JB III-21)

音楽を除く全ての芸術に最も内的なエートス、最後の衝動として共通に残るのは形象への意志 *der wille zum bilde* である。人間の本質は形象的なものの提供であり体験であり、視覚的である、とヴォルフスケールは断じる。ラツァルス・ガイガー (Lazarus Geiger 1829-1870) に依拠しつつ、ヴォルフスケールは人間の言葉も視覚的現象であるとする。言葉は「その表現の素材が音響的であるにすぎない。創造は全て可視的にすることであり、生は全て可視的になることであり、神の秘儀は全て視覚であり、人間にとっての照明である。」(JB III-22) 原形象的なもの *urbildliches* は詩人の創造的感覚を通して、エロス—カイロスの栄光において、象徴 *sinnbild* とならねばならない。詩人において束縛されることなくざわめく生は、創造的諸力の頂点をなすカイロスを通して、完成された詩の生の戦慄 *lebensschau* となる。(JB III-23)

造形芸術は感覚が捉えたものを素材の中で模倣・模写的に形成することを通して空間的感覚的なものに到達する。造形芸術化とその作品の生と諸力全体へ

の関係は、詩的芸術家とその作品のそれと同じである、「というのは彼にとっても人間的に割り当てられた魂の表現、すなわち肉体的表現が、不動の中心をなしているからである。」（JB III-24）

しかし音楽は他の諸芸術の中で謎めいていて異様である。「あらゆる模倣、あらゆる反射、あらゆる改造から離れて、音楽はそれでも生をエッセンスのように自身のうちに含有しているように見える。その論理的形成の厳格さ、その構成の首尾一貫性のゆえに音楽は、それじたい完全に非理性的なものでありながら、抽象的な精神性の法則に従っており、ほかのどんな芸術にもないほどに計算可能であり、ほとんど証明可能であり、同時にあらゆる限界なき、あらゆる強すぎる、あらゆる不定の衝動を目覚めさせ満足させることが可能でありその用意がある。」（JB III-24f.）しかしヴォルフスケールの見るところ、音楽においては、造形芸術や文芸を生に組み込んでいるような、いかなる諸力も活動していない。「音楽は、人間の全体 *das gesamt-menschliche* から出発せず、その明白性が形象的なるもの *ein bildhaftes* に根差しておらず、個々の感覚の法則、基準、および運動を通して精神的なるものに到達する、唯一の魂の表現である。というのは音楽は第一に専ら音響的形成物として、肉体的な（視覚的志向を持つ）現象とも言語的な（同様に視覚的志向を持つ）現象とも疎遠である。従って音楽は外的に見ても内的に受け止めても人間の全体からは遠いまでである。」（JB III-25）音楽はその独立性と独自性に奉仕し、あらゆる時空的偶然的観念性から自由に、純粋な原生命の意志 *der reine urlebenswille* を表現する。音楽はそれ自体独自の絶対的本質であり、そのために芸術と人間の根本的統一から逸脱している。

音楽は形成原理 *das formende prinzip* から発生するものではない。音楽の中では混沌が混沌に、マクロの混沌がミクロの混沌に至る。（JB III-26）混沌は音楽において開示され、音楽家に親しい混沌を見出す。もちろん混沌を拘束し、音楽の可能性の範囲内で形成する、強制する精神も見出すのだが、その精神は、有機的形成の法則ではなく、純粋なる素材の法則、物理的もしくは生理学的

な純粹なる結合法則，すなわち数学的・論理的な精神法則に従って，音楽の素材的・知性的な本質と結びついている。というのは，音楽には内在的形式はなく，音楽の本質から生まれる必然的な形成のあり方もないからだ。(JB Ⅲ-27)

音楽を通して個人は最終的に諸力に対して主導権を得るため，音楽の勝利は例外なく個人の勝利となる。ベートーベンやヴァーグナーは，混沌の衝動から憧憬にみちて膨張し，人間の限界を超えて掴みかかりながら，他の世界からの響きを彼の作品へと引き摺うのだが，しかしこれもまた略奪，神に疎まれ災いを創りだす冒瀆である。

音楽の歴史は，従って最初の弛緩から今日の断末魔にいたるまでの，ヨーロッパの魂の退廃の歴史へと拡大する — それは神の喪失，悲劇的品位を欠いた没落遊戯，傲慢と自己破壊の終末曲である。(ebd.) 音楽は崩壊の成果であり，瓦解の産物である。音楽は病いに襲われたヨーロッパにおける最重要のおそらくもっとも絶望的な病いの形式である。(JB Ⅲ-28)

音楽は解き放たれた時間の，革命の，ロマン主義の芸術となった。ロマン主義は形成的な力 *gestaltende kraft* と混沌の偶然的に成立した関係であり，個人と全体の見境なく生じた混淆である。音楽の本質は，古典的な音楽は決して存在しなかったと言わねばならぬほどに，完全にロマン主義的である。(JB Ⅲ-30) 音楽には独自のエートスも，生まれつきの態度もなく，音楽は生に対して何らの要求も立てない。生の形成する原理とは根本的に疎遠なのである。ヴァーグナーの作品は音楽の発展総体の論理的に見て避くべからざる結果であり，彼の作品において限界なきものとなった混沌が「無限のメロディー」へと変容したことは，音楽の古い原理からの離反ではなく，その最も内奥からの内実の最終的に真実この上ない現象形態なのである。ヴァーグナーは実現者 *erfüller* になった。過去の全体，市民的時代の全て，「私の世界」の全てが彼の中に流入し，彼に汲みつくされた。ヴァーグナーの音楽はヨーロッパ音楽の発展の必然的な帰結である。いまや混沌，原初的に不等なもの *das ur-ungleiche* が自己表現している。全ての源泉は汲み尽くされた。(JB Ⅲ-31) ヴァーグナー以降の音楽

は「無に照準を合わせた芸術、枯れ果てた井戸の桶」と呼ばれる。最後の一文でしかしヴォルフスケールは転換への希望を語る。「もしわれわれの何らかの希望が真実となるならば、もし新しい生 *das neue Leben* が自らを知り、王国 *das Reich* が実現されるなら、その時には退化は終わりを迎え、それとともに音楽の支配も終わりを迎えるはずだ。」(JB III-32) ヴァーグナーをヨーロッパ文化の退廃の象徴と見なし、そこからの転換の希望をゲオルゲ・クライスが担っていると主張して、この評論は閉じられる。

4. フリードリヒ・ヴォルタース「人間と属」

ヴォルタースの巻末論文「人間と属」は章分けされていないが、その内容はいくつかの部分に分かれる。第一章は人間と人類(=ヒト属)という対立概念を軸とした近代批判、第二章は偉大なる男性=支配者論、第三章は女性論、第四章は教育論である。

近代批判は、「一般的なもののどれよりも重要なのは特殊な者、属より重要なのは人間である」(JB III-139)という対句で始まる。しかし近代では「つねに神より来たり神の中に入ってゆく人間に代わって、空疎な一般性、進歩的な人類 *die fortschrittliche menschheit*」が本当のものと思われるようになった。」

われわれは「われわれの判断とわれわれの意志がいずれの場合においても属の判断となる能力を持つ」べきであるとされる。しかし父、友、支配者を放り出し、種族 *geschlecht*, クライス *kreis*, 民族 *volk* を棄てて、属 *die gattung* の判断の基準を探してみよ。残るのは個々人 *der einzelne*, たった一人の者 *der einzige*, 判断を認識し表現する個人 *das individuum* に過ぎない。われわれの時代はこの最後の一般物、個人と属を、最高価値としてその銘盤に書き込み、この幽霊の共同体を生に呼び起こすことがこの時代の最後の望みであり、いまだ残っている他の人間的紐帯は全て、この幽霊の

共同体を生かすため、解体されるべきとされる。(JB Ⅲ-140)

個人は属を代表するとされるが、属それ自体には何の意味も内容もない、それゆえに属は人間から人間性 *menschlichkeit* を借用し、自身とその自由な代表のために唯一の目標に据えた。古典古代においては人間性は特別な生活の基盤で育った共同体の構成員に共有されており、組織体に結びつけられたものとしての人間と人間の関係は所与のものだった。しかしキリスト教において、世界は神の世界と人間の世界に分裂し、ひとつの感覚的空間は引き裂かれた。さらに近代に至り、神の世界がその本質を失い、没落しようとしたとき、^{いにしえ}古の統一的人間性 *die alte einheitliche menschlichkeit*、古典古代のフマニテート *die antike humanität* への呼びかけが行われた。しかしその時にはすでに神的なものは空疎化していた。(JB Ⅲ-141) 残ったものは概念的統一、人類 *die menschheit* しかなかった。近代のフマニテート *die moderne humanität* は人間性 *die menschlichkeit* とは何の共通性もない。この近代のフマニテートの下で、全ての感覚、全ての行為は人類の安寧 *heil*、全体の幸福に従って規定さるべきとされた。全体の幸福とは他方では、力の消耗、創造的なものの断念、分割されざる全体の人間の破壊である。諸力の全てを備えた人間、善と悪、憎悪と愛を備えた人間は、このフマニテートに奉仕することはできない。全ての人は人類を前にすれば等しい、とフマニテートは教える。(JB Ⅲ-142) 特別な人間性 *die besondere menschlichkeit* が一般的な人類 *eine allgemeine menschheit* へと平板化したとき、人間性は偉大なる者たちを属の代表に序列することができず、彼らに犯罪者、破壊者の烙印を押す。逆にフマニテートは今日、貧者、病者、弱者の保護を最上かつ唯一の使命だとし、すなわち貧者、病者、弱者を人類の最上の部分だと宣言するに至った。(JB Ⅲ-143)

以上が、人間と人類(=ヒト属)という対立概念を軸とした近代批判の概要である。一方に特殊性 *die besonderheit*、古典古代 *antike*、人間 *der mensch*、クライス *der kreis*、人間性 *die menschlichkeit* を置き、他方に一般性 *die allgemeinheit*、

近代 *moderne*, 個人 *das individuum*, ヒト属 *gattung*, フマニテート *die humanität* を対置させ、前者を失われた理想と説き、後者を批判する、図式的二元論が展開されている。この特殊性と人間の称揚は、第二章の男性論＝支配者論に引き継がれる。

近代批判の章と同じく、男性論は「案出されたもの全てよりも育ったもの *das gewachsene*, どんな目的概念よりも創造する男 *der schaffende mann* が重要である」(ebd.) という対句によってはじめられる。成長するもの、有機体としての仲間は、男のみを根本として形成される。ゲオルゲ・クライスは、他の全てのものと異なっていること、特別であることが、初めて権利と価値を意味すると考える。属の代表であるかはどうでもよいことであり、特別な者として際立つことが、はじめて男を成すとされる。男と男のあいだでは特別な力を通じて生命力あるもの *das lebendige* が結びつき、共同体が成立する。この「人間に必要な特別性」 *die nötige besonderheit des menschen* を体現するのが「精神的支配者」 *der geistige herrscher* だとされる。「精神的支配者の中には、新たな創造の目に見える始原があり、彼の影響力の本質は、生ある成長の明らかな徴、すなわち共同体における、より高度の強制による特別な人間の強化、自由と支配のより緊密な統一、という徴を帯びているからである。それゆえにわれわれは人類からではなく、男から律法 *gebot* と形象 *bild* を受け取るのだ！」(JB III-144) フマニテートは偉大な男を憎悪し、破壊者と見なし、排斥しようとする。しかし「人間の燃えあがる眼と心酔した心の前では、常により明かだったのは、偉大な男たちの創造的行動、内的な創造の衝迫から来るかれらの王国の建設、かれらの業績の建設の恐るべき躍動、そして永遠性の印の下での極く細部にまでいたる努力であった。」(JB III-145) 支配者はより強大な諸力の充溢をより高い結合へと統一し (ebd.), 自らを形姿としてより強固に特別なものとする。(JB III-146) 「支配者に残されているのは、彼の創造的な意志の手段または対象としての広大な現実のみである。存在するもの *das seiende* を彼のイメージに従って形成しつつ造り変える *gestaltend umgestalten* ことが彼

の欲求、目標であり、彼は属にはかかずらわれない。あらゆる現実の唯一の根源である、肉体と精神の自由と結合である人間のみにかれは関心を寄せる。人間が自分の精神の形式を充溢させ、成長しつつさらに形成するように、人間を生き生きと把握し、人間を解き放し結集することが、支配者の唯一の熱望である。」(ebd.)

ヴォルタースの男性論＝英雄論は、共同体＝国家論へ展開していく。エロスが共同体を形成し、それぞれの男において生殖 *zeugen* し、作用し続ける。より大いなるものが、より小さきものの模範 *vorbild* もしくは生ける師 *sein lebender meister* として尺度となる。支配する男たちは、彼らの共同体の表現形式として法 *gesetz* を定める。立法者 *der gesetzgeber* はそれ自身が国家 *der staat* である特別な人間を生み出さねばならない。彼らは一般的な人類の国家 *menschheitsstaat* を求めず、そのような国家の発展にも期待をかけない。

有機的共同体は全て運動するものと静まるもの、より深い意味で行動的諸力と受動的諸力の統一だからだ。これらの諸力は自然の大いなる収支において永遠の炎と永遠の糧のように振舞う。後者は前者なくしては死であり、前者は後者なくしては煙と化する。炎の本質は創造であり、糧の本質は犠牲である。その両者による特別な白熱が共同体の本質であり、炎において可視となる。根本的關係において平等が存在しないのと同じように、他の人間的な共同体の諸形式のどれにも平等は存在しない。(JB Ⅲ-147)

この記述は、前述したフリードリヒ・グンドルフの「臣従と弟子」の最終節⁹⁾やヴォルタースの『支配と奉仕』における支配の享受の第三段階「自己犠牲」の一節¹⁰⁾と響きあうが、観念的な「臣従と弟子」や『支配と奉仕』での叙述に

9) 「かれら(引用者注:弟子たち)は自らの自己を消し去り、より貴い炎のための焚木であることを喜ぶ。(中略)かれらは自らが素材、手段に過ぎないことを知るべきであり、ふたたび犠牲となる *opfern* ことを学ぶべきである。」Gundolf, Friedrich: *Gefolgschaft und Jüngertum*. In: *Blätter für die Kunst*, 8. Folge, 1910, S. 111. また、注8)も参照のこと。

対し、「人間と属」のそれはより現実的・政治的傾向を帯びている。社会における平等の否定は、国家における支配層の肯定と、優越的民族・国家による他民族・他国の支配の肯定につながっていく。「国家には官僚や同権を与えられたものだけでなく支配する男たちがいなければならないし、地上には、均衡の代表者だけでなく支配する民族 herrschende völker がなくてはならぬ。もはや支配し、創造する男たちを生むことのできない国家や民族は、死にゆく形象であり、より強い生をもつ隣国は、退廃した国を解体しその残滓を隷属させるのが正当である。」(ebd.)

このような「男性的支配」への要求の後、ヴォルタースの舌鋒は女性に向かう。ヴォルタースによると、人間一般に限らず、男女間においても「一般的な平等ではなく自然な差異 der natürliche unterschied が再び人権とならねばならない。」彼によれば、「女^{うづわ}という性」は「自然が永遠の糧の保持 die bewahrung をその本質と規定として与えた器 das gefäß」であり、「自然は女を極く狭い最も固定した圏への特殊なものへの愛に制限した。」そのような女が「虚無に夢中になり始め、それによって何か新しいことを世界にもたせると信じている。(しかし) 最上の場合でも彼女らが求め受け取るのはモダンな文化 die moderne kultur に過ぎない。(中略) 彼女らの力は男の炎なくしては輝くことができず、彼女らの諸力の消費は彼女らの胎を不妊にするが彼女たちの精神を実り多いものにするとは決してなかった」。(JB III-148) 男にとっても女自身にとってもとりわけ洗練された敵、「人間の敵」は「あの賢い女たち、時間をより女性的なやり方で理解し、フマーンな男の口から弱さの法を理解し、自分たちの方で

10) 「支配者は自分の中で燃える神的な炎をその天空の星とし、もっとも熱愛された者が彼の作品の火焰の中を通して崇高な圏へと動けるようにし、恭順な息子の立場でより高められた創造者の被造物として再び形を取り、受入れられたものの全情熱を持ってふたたび支配者のもとへと降下できるようにする。(中略) より高き存在のために自らの存在を無条件に犠牲にしてのみ自由はある。〈支配〉の至純の受入れのみが結合を呼び起こす。それを受け止めるものがなくては光は温もりをもたらしことがないように、〈支配者〉の〈精神的行為〉は開かれた魂がなくては空虚な宇宙に落ちるばかりで、いずこにも留まることなく、孤独という恐るべき苦痛の中で自らを滅ぼすのみである。」 Wolters, Friedrich: Herrschaft und Dienst. Bondi: Berlin (3. Aufl.) 1923, S. 59f.

は女の弱さから女の自然な優先権を引き出すことを知っているあの女たちだ」とヴォルタースは攻撃する。このレディ *die lady* たちは荒々しい男の優越を破壊する。その本質は「全て享楽、すべて消費であり、彼女のためだけに全ての技術文化をおそるべく蕩尽することである。」ゆえに「われわれは女 *die frau* に対してではなく、その蔓延する奇形である〈モダンガール *die moderne frau*〉に対して戦っているのである。」(JB Ⅲ-149) 他方、正しき女 *rechte frauen* にはいまだにペリクレスの言葉が当てはまるとされる。「汝らが汝らの性にふさわしいあり方 *die euren geschlechte gebührende art* を否定せず、賞賛においても非難においてもでなく、できる限り僅かしか男たちが汝らについて心がけないですむようであれば、あまりにも大きな名誉が汝らには与えられるであろう。」(JB Ⅲ-149f.)

ここで表明されている超保守的な女性観は、ゲルトルート・ジンメルや画家ザビーネ・レープシウスを初めとする、ゲオルゲ・クライス周辺の女性たちからも憤激を買った¹¹⁾ グンドルフの筆による編集者序がしかしヴォルタース論文の擁護ないし解説的機能を果たしていることから、このような差別的な女性観はゲオルゲ・クライスに共有されていたと見ざるを得ない。

最終章は、エロスに根差す男性同盟へと青少年を召喚するアジェーションである。この章も、他と同じように、対句によって始まる。「しかし考えられたものの全てよりも重要なのは生まれたもの、どんな認識より重要なのは子どもである。」子どもは肉体的・精神的統一の次世代の特別な担い手である。しかしフマニテートは全人的な陶冶ではなく、属の有能な代表あるいは職能に優れた専門的官僚へと少年を教育しようとする。また、二十歳にいたるまで教育が専ら女性の手委ねられており、男から少年に対する最も大切に実り多い影響を与える機会を奪っていることも問題であるとされる。(JB Ⅲ-150)

それに対してヴォルタースが重要視するのは「少年と青年、青年と男の間の

11) Cf. Stefan George - Friedrich Gundolf: Briefwechsel. Hrsg. v. Robert Boehringer mit Georg Peter Landmann, Kupper: München; Düsseldorf 1962, S. 228ff.

必要な密接な一体化」(JB III-151)である。少年や青年が生の純粋な炎に燃え、気高い善きもの *ein hohes gut* を崇拜しようとしても、彼らの願望に意味と模範を与えてくれる人間を探すことは困難である。「永遠の真実は形姿としてしか現れないし、感覚的に限定されたものの中でしかその法を、まさに特別な肉体的な統一の法として示さない。それゆえに偉人 *der grösste mensch* は最深の真実であり、英雄と支配者 *held und herrscher* のみが真実なのだ！ 彼のみが真実でありえる、というのは彼のロゴスは彼の神聖なエロスの放射した外円にほかならず、彼の行動、形成、洞察は彼の血の必然的な流出にほかならないからだ。英雄、支配者に真実を探せ、英雄的に高められた人間に真の友と汝らの青春の指導者を探すのだ。」(ebd.) ヴォルタースは以上のように、偉大なる者を探し、範とすることを青少年に熱烈に薦める。「生あるもの、男たち、そこから君たちが君たちのイメージと掟を獲ることのできる男性共同体 *die männliche gemeinschaft* にのみ、君たちの犠牲は値する。(中略) 友のため、指導者のため、支配者のための犠牲を通して、君たちの最上の意志は誇らしくも他と一線を画した特別な存在に参与し、君たちを内的な正当性とともクライスの内的義務、肉体的な貴族性の振る舞いをもって精神的行為の法に目覚めさせる。」(JB III-153) このエロスによる教育は、善行の満足、快適さの中の安寧、富の享受、人類の役に立ったという満足感、あるいは個人的な幸不幸、一般的な真実と虚偽といった対立にはかかずらわない。

エロスが人間により深く根ざすほど、これらの対立は、行動的美徳、美しく偉大なるものへの形成の男性的意志のまにに消えてゆく。エロスに捉われたいのであれば、君たちの幸福は求めず、肉体と精神の美と行動力 *schönheit und tat-kraft des leibes und geistes* を求めよ、美を君たちの中で形成し、行動力を君たちの中で鍛えよ、偉大なる死者たちの模範に従い、生ける支配者の声に従い、愛される友の求める心臓に従い、リズムカルな法則に応じて君たち独自の人間の響きが君たちから発し、その響きが君たち

自身を男へ、師 *meister* へ、そして神聖なるものがそれを望むのであれば、英雄 *helden* へと成すのだ。そのとき君たちはあらゆる概念を超えた存在を、あらゆる智を超えた生を、あらゆる幸福を超えた誇りを感じる。
(JB III-153f.)

ヴォルタースは、美と力の統一への希求、過去の偉人と現代の指導者への信奉、同胞への愛にもとづく献身への呼び掛け、男性的なるもの、師、英雄への飛躍願望を刺激することによって、青少年をクライスに組織化しようとするのである。この評論は、幸福を「粥、ぬるま湯」として唾棄する『ヒューリオン』の引用によって閉じられる。

5. 第一次世界大戦と『精神運動年鑑』の終刊

a) 編集者が『精神運動年鑑』をその後も刊行する準備をしていたこと

『精神運動年鑑』は1911年発行のこの第3巻以降発行されなかった。しかし『年鑑』は最初から「三号雑誌」で終刊するよう計画されていたわけではなかった。フリードリヒ・グンドルフとヴォルタースの往復書簡の編集者である Ch. Fricker は出版計画を次のように整理している。「計画されていた『年鑑』第4巻は、開戦時にはほとんど完成していた。これは二人の編集者が急き立てたおかげだった。ヴォルタースは1913年11月17日に記している。彼は〈すでに『年鑑』の新刊の火を掻き立てています。〉(Nr. 57) グンドルフも1914年春に新刊は〈今や差し迫った *jezt imminent*〉もので、〈編集の狂乱〉(Nr. 65) が再び彼の中で目覚めたと記している。複数の論文が揃い、5月19日には『年鑑』新刊が〈いまやかなり成立した〉と報告 (Nr. 71) できるほどであった。』¹²⁾ 大

12) Fricker, Christophe (Hrsg. u. Einleitung): Einleitung. In: Friedrich Gundolf - Friedrich Wolters. Ein Briefwechsel aus dem Kreis um Stefan George. Böhlau: Köln; Weimar; Wien 2009, S. 21. 書簡からの引用は〈 〉で示し、同書の書簡番号 (Nr. ...) を付す。

戦勃発後も刊行への模索は続いた。「1914年10月には、〈ヴォルフスケール、グンドルフ、ファレンティン、ヒルデブランドト、ヴォルタース〉の論文を載せた『戦争小冊子を刊行する』可能性についてゲオルゲが語っている。（George-Gundolf, Briefwechsel, S. 270.）第一次世界大戦（1914年7月28日-1918年11月11日）勃発後にも『年鑑』は再び計画されることになった。次のリストが本書（Gundolf-Wolters, Briefwechsel）で言及された所載可能な論考である（著者アルファベット順）。カッコ内に書簡の著者と、開戦後に初めて言及された日付を記す。

Robert Boehringer über Gedichte (FW, 15. 04. 1914)

Heinrich Friedemann über Plato (FW, 10. 02. 1914)

Ernst Gundolf über Nietzsche (FW, 15. 04. 1914 ; FW, 01. 01. 1920)

Friedrich Gundolf: Dichter und Helden (FW, 01. 01. 1920)

Friedrich Gundolf über Volk und Bildung (FG, 04. 01. 1920)

Kurt Hildebrandt (FW, 15. 04. 1914)

Carl Petersen über Musik (FW, 15. 04. 1914)

Parl Thiersch: Symbol und Bild (FW, 15. 04. 1914)

Berthold Vallentin (FG, 16. 04. 1914)

Balduin Waldhausen: “Verteidigung der Dichtkunst” (Shelley-Übertragung)
(FW, 17. 01. 1919)

Friedrich Wolters über ein sozialpolitisches Thema (FW, 10. 02. 1914)

1920年1月21日にヴォルタースは『年鑑』第5巻の可能性について言及しているが、具体的な計画はもはや着手されなかった。¹³⁾

13) Fricker, Christophe (Hrsg. u. Einleitung): Anhang. In: Friedrich Gundolf - Friedrich Wolters. Ein Briefwechsel aus dem Kreis um Stefan Goerge. Böhlau: Köln; Weimar; Wien 2009, S. 261.

b) 第一次世界大戦の勃発とゲオルゲ・クライスへの影響

上記のリストから逆に分かるのは、1915年以降1920年に至るまで、具体的な著者名を挙げての編集作業が行われていないことである。最大の原因は、編集者両名が軍務に就いたことにある。フリードリヒ・グンドルフは1915年4月6日にダルムシュタットの歩兵連隊に召集された¹⁴⁾ ヴォルタースもまた1915年2月1日から兵役についた。「まず彼は運転手としてフランスに、次いでセルビアとマケドニアに派遣されたが、直接的な前線の配置は、おそらく帝室との関係のために、控えられた。1917年初めに彼は重度の関節リュウマチに罹り、長期間野戦病院に入院することとなった。1918年始めにやっとふたたび兵役につくこととなり、再びフランスに派遣されたが、そこで終戦を迎えることとなった。」¹⁵⁾ 編集者たちは、編集作業に取り組む状況になかったのである。

さらに戦争を巡って、ゲオルゲとゲオルゲ・クライスの構成員の間で意見の齟齬が生じたことも、『年鑑』の刊行を困難にした原因の一つと考えられる。ゲオルゲは終始この戦争にアンビヴァレントな立場をとっていた。「18世紀の子ではないとしても19世紀の子として、彼は戦争に、彼の考えによればドイツにいまだに存在している〈古い実質〉alte substanzを活気づけ活性化しうるかもしれない手段、『年鑑』が呼び覚ました〈非戦士の、女性的、破壊的なものに抗うあらゆる有能で強力な本能の消失〉に対する解毒剤を見出していた。他方、次の戦争は近代文明の手段を用いて遂行されるであろうし、望まれるものとは逆の作用をもたらすであろうという問題があった。」¹⁶⁾ 開戦後3年間の沈黙の後ゲオルゲが1917年に発表した詩「戦争」は「現代をラディカルに清

14) Friedrich Gundolf an Friedrich Wolters, am 4. 4. 1915 aus Darmstadt. In: Friedrich Gundolf - Friedrich Wolters. Ein Briefwechsel aus dem Kreis um Stefan George. Hrsg. u. eingel. v. Fricker, Christophe. Böhlau: Köln; Weimar; Wien 2009, S. 121.

15) Schlüter, Bastian: Artikel über Friedrich Wolters. In: Aurnhammer, Achim; Braungart, Wolfgang; Breuer, Stefan; Oelmann, Ute (Hrsg.): Stefan George und sein Kreis. Ein Handbuch. de Gruyter: Berlin; Boston 2012, S. 1775.

16) Breuer, Stefan: Artikel über Zeitkritik und Politik. In: Aurnhammer, Achim; Braungart, Wolfgang; Breuer, Stefan; Oelmann, Ute (Hrsg.): Stefan George und sein Kreis. Ein Handbuch. de Gruyter: Berlin; Boston 2012, S. 781.

算するために、第一次世界大戦を利用する反戦詩であった。』¹⁷⁾ 他方、グンドルフ、ヴォルタース、ヒルデブラントを中心とするゲオルゲ・クライスの主流は「1914年8月に特に中流層を捉えた融合の興奮に参加した。ヒルデブラントはフリーデマンとともに、民衆に引き攫われ有頂天になって皇帝の息子の馬車に並んで走ったことを思い出している。ヴォルタース、ファレンティン、ザーリン、トルメーレン、その他大勢が即刻兵役を志願した。ヴォルフスケールすら、半盲だったにもかかわらず、戦線に加わろうと無駄な努力をした。武器で貢献しようとして拒まれたことを、彼はペンで取り返そうとした。1914年9月12日にロマン・ロラン宛の公開書簡でヴォルフスケールは戦争を〈秘密のドイツ〉に関わり、戦争には〈人間の中の神聖なもの〉、〈われわれとヨーロッパの存立〉が係っていると宣言した。』¹⁸⁾『年鑑』はゲオルゲ・クライスが「等しきもの」であり、その統一の見解の発表の場であることを標榜していた。文芸誌であった「芸術草紙」と異なり、社会批評をその柱のひとつとする『年鑑』を戦中に刊行するとすれば、戦争に対する見解を表明することを避けるわけにはいかなかったろう。ゲオルゲとゲオルゲ・クライスの構成員の間で戦争に対する態度がこれだけ大きく異なっていたことが、『年鑑』刊行の障害になったことは想像に難くない。

さらに、ゲオルゲ・クライスの中でも、構成員間の意見や立場の齟齬が徐々に広がってきていた。ヒルデブラントによると、緊密に結束した結社としてのゲオルゲ・クライスは、「全三巻の『精神運動年鑑』が発行されていたわずかな期間（1910-12）しか存在しなかった。すでに1912年秋にはベルリンでヴォルタースと、ファレンティン、バーリンガー、モルヴィッツの間に緊張が生じた。ファレンティン、バーリンガー、モルヴィッツの三人がクライスにおいて師の権威しか認めようとしなかったのに対し、ヴォルタースは師の権威から導

17) Aurnhammer, Achim : Kriegskritik als Nachkriegsvision. Stefan Georges Dichtung *Der Krieg* (1917). In : Cultura Tedesca Bd. 46, 2014, S. 67.

18) Breuer, Stefan : a. a. O. S. 782.

き出された〈彼自身の権威〉を要求したのである（Hildebrandt 1965, 91）。ゲオルゲはこの諍いに介入しなかったが、シュマーレンバッハが認めているように（Boehrer 1967, 255）その後すぐに定期的な読書会を催し、クライスの分裂、〈即ち、ヴォルタースーファレンティンと、グンドルフ、モルヴィッツ、ペーリンガーを中心とする個別のクライスへの分裂を承認した。『盟約の星』第三巻に歌われているような友人間の結社は、もはやなかった。あったのは個別のクライスであり、それぞれは師への帰依という点では一致していたものの、その活動の要点は、そのメンバーのうちの数人を師の個人的なクライスへと導くことを許されているという点にあった。〉（Hildebrandt 1965, 152）¹⁹⁾『年鑑』刊行時には表面化することのなかった精神運動の目的の違いが、グンドルフとヴォルタースの間で徐々に明らかになってきた。グンドルフが新しい教養エリート形成を精神運動の目標としたのに対して、ヴォルタースは詩人と学者の共同体に国家的運動の萌芽を認め、より直接的な政治的影響力を及ぼすことを目標とするようになった²⁰⁾。彼らの関係は、協力より、むしろ競合するものに変わっていったのである。

また、「精神運動」の目標を教養エリート形成に置くにせよ、政治的影響力の行使に置くにせよ、その担い手となることをゲオルゲが期待していた若者の死を、第一次世界大戦は相次いでもたらすことになった。ハインリヒ・フリーデマンは東部戦線で戦死、ノルベルト・フォン・ヘリングラートはヴェルダン戦で戦死、ヴォルフガング・ハイゼラーは行方不明となった。コルネリウス・バルドウィン戦後は戦傷死、パーシー・ゴタインとベルンハルト・フォン・シュヴァイニッツは重傷を負い、ヴァルター・ヴェングヘーファーは自死

19) Breuer, Stefan : Ästhetischer Fundamentalismus. Stefan George und der deutsche Antimodernismus. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt : 1995. S. 80f.

20) Cf. Groppe, Carola : Konkurrierende Weltanschauungsmodelle im Kontext von Kreisentwicklung und Außenwirkung des George-Kreises : Friedrich Gundolf - Friedrich Wolters. In : Wolfgang Braungart ; Ute Oelmann ; Bernhard Böschstein (Hrsg.) : Stefan George. Werk und Wirkung seit dem 'Siebenten Reing'. Niemeyer : Tübingen 2001, S. 265-282.

した²¹⁾「精神運動」は書き手である第一世代から教えを受け、同世代の若者たちに広めるべき第二世代を大幅に失うことになったのである。それは『年鑑』というメディア戦略の見直しを迫る事態であった。

ゲオルゲおよびクライスにとって最も衝撃だったのは、アダルベルト・コールス（1897-1918）とベルンハルト・フォン・ウクスクル＝ギュレンバント伯爵（1899-1918）の死だった。ヴェルテンベルク王家に仕える大尉であるヨハネ騎士団名誉騎士を父に持つベルンハルトは、兄ヴォルデマールとともに、ゲオルゲの最も近い弟子であったエルンスト・モルヴィッツに1906年以来教育され、1907年ゲオルゲにも引き合わされた。その出自からも、ベルンハルトはゲオルゲが求めた「新しい貴族」にふさわしい人物になると期待されていた。アダルベルトも1917年にモルヴィッツの仲介でゲオルゲの弟子となった。ギムナジウム卒業を前にして、ベルンハルトは同窓のアダルベルトと相愛の仲となった。アダルベルトは1915年に野戦砲兵連隊に志願し、ベルンハルトもギムナジウム卒業後の1917年に第一近衛野戦砲兵連隊に仕官した。1917年まで西部戦線で従軍したアダルベルトは神経的虚脱の診断を受け、野戦病院に入院し、二度と前線に戻るまいと決意する。1918年6月18日に二人は中立国だったオランダに逃亡を図り、捕らえられ、兵営での尋問の最中に自殺した。「何世代にもわたってヴェルテンブルク家に名誉とともに仕えてきた古い貴族の後裔であり、プロイセン近衛連隊に所属し、ゲオルゲに最も愛された孫弟子であり、それゆえ危険が差し迫ろうとも耐え抜けというゲオルゲの指示を弟子もその友も守ると期待することのできた、ウクスクル＝ギュレンバント伯爵が脱走するなどとは、本来考えられないことだった。／この規範と信頼に対する違反にゲオルゲ・クライスは誠実に向き合おうとせず、また向き合うことができなかった。失敗に終わった脱走と二人の自殺は、二人の愛しあう友人たちの犠牲の道行きへと美化された。年長のコールスは戦場で死ぬ運命を避けるため自死

21) Cf. Winkler, Michael : George-Kreis. Metzler : Stuttgart 1972, S. 87.

を求め、年下のウクスクル＝ギュレンバントは絶対的な忠誠のため友の後を追ったというのだ。この〈伝説〉をゲオルゲの詩『ヴィクトール＊アダルベルト』は反映している。²²⁾

この事件は、ヴォルタースが「人間と属」の最終章で語っていた、男性同盟における師弟関係の中での教育というプログラムが破綻したことを意味していた。ゲオルゲ＝モルヴィッツ＝ウクスクル＝ギュレンバントという教育の理想形が、戦争という脅威の下では機能しなかったのである。ベルンハルトとアダルベルトの相思関係も、エロスを基盤とした男性間の教育というゲオルゲ・クライスのプログラムにスキャンダルを導きかねないものであった。戦時下のドイツで『年鑑』を刊行するのであれば、この問題について何らかの見解を出さないわけにはいかなかったろう。それは不可能であった。観念的、陰喩的表現が多用されているとはいえ、評論を中心とする『年鑑』では詩的粉飾は行い難い。もしそれが必要であれば、ゲオルゲ・クライスは「芸術草紙」という別のメディアを有していた²³⁾「数年後、ふたりの運命と人物像については詩的形式でしか語ってはならない、とゲオルゲは布告した。」²⁴⁾これは、この事件について正面から取り組むことをゲオルゲ自身が最終的に放棄したことを物語るものと思われる。

もうひとつ別の側面についてもここで触れておこう。1911年以来、ゲオルゲ・クライスの構成員は相次いで著作を出版している。ヴォルタースの『変化と信仰』²⁵⁾グンドルフ『シェイクスピアとドイツ精神』²⁶⁾ハインリヒ・フリーデマン『プラトン：その形姿』²⁷⁾グンドルフ『ゲーテ』²⁸⁾特にグンドルフの二

22) Grünewald, Eckhart: Artikel über Bernhard von Uxkull-Gyllenband. In: Aurnhammer, Achim; Braungart, Wolfgang; Breuer, Stefan; Oelmann, Ute (Hrsg.): Stefan George und sein Kreis. Ein Handbuch. de Gruyter: Berlin; Boston 2012, S. 1721.

23) 実際、1914年には4年間の休刊期間を経て「芸術草紙」第10巻が刊行されている。

24) Kluncker, Karlhans: Percy Gothein. Humanist und Erzieher. Das Ärgernis im George-Kreis. In: Castrum Peregrini 35, 1986, Heft 171/172, S. 59. Hier nach Eckhart Grünewald: a. a. O. S. 1722.

25) Wolters, Friedrich: Wandel und Glaube. Blätter für die Kunst: Berlin 1911.

26) Gundolf, Friedrich: Shakespeare und der deutsche Geist. Bondi: Berlin 1911.

著作は大きな反響を呼んだ。グンドルフは1911年にハイデルベルクで、ヴォルタースは1914年3月にベルリン大学で教授資格を取得した。ゲオルゲ・クライスの思想を発表し、青年層に訴えかけるメディアとしての『年鑑』の重要性は、相対的に低くなっていったのである。

お わ り に

以上、『精神運動年鑑』の主要論文を中心にその内容を論じてきたが、最後に『年鑑』全3巻をとおして全体の特徴をまとめてみよう。

学問的には反実証主義、反相对主義、反合理主義、分析的研究に対する反感が共通の特徴であり、従ってその立論においては分析や、概念の厳密な定義づけ、論証といった手続きが回避され、込み入った文体と相まって、内容の理解を困難にしている。それを補うため、陰喩的な表象あるいは図像的なイメージによって、直観的に把握させようとする手法が用いられることもある。

^{ホリスティック}全体主義的世界観をもとに、マクロコスモスとミクロコスモスの照応、精神と肉体の統一、生氣あるもの、創造力、洞察が重視されている。

ゲオルゲ・クライスは、自らをゲーテ、ヘルダーリンをはじめとする19世紀以来の近代批判の系譜に立ち、ニーチェを引き継ぐものと自己理解していた。一方、ヴァーグナーに対しては批判的態度がとられている。政治的には反個人主義、反社会主義、反進歩主義、反近代、反大衆の立場をとり、理想化されたドイツの過去を再生させようとするナショナリスティックな傾向が強い(秘密のドイツ)。

歴史的には、古典古代における精神と肉体の一致、神の肉体化を理想視し、キリスト教以降、神的なものが人間から乖離し、さらに近代に至って人間と世界が分裂したと見なす。偉大なる詩人や英雄はしかし、いまだ失われぬ中心的

27) Friedemann, Heinrich: Platon: seine Gestalt. Blätter für die Kunst: Berlin 1914.

28) Gundolf, Friedrich: Goethe. Bondi: Berlin 1916.

な活力、実体を目覚めさせ、それぞれの時代の課題を背負い、失われた統一を恢復する。持続的な時間の流れや変化・発展ではなく、変わることはない存在と特権的な時間（カイロス）が重視される。

フリードリヒ・グンドルフが著したダンテ、シェイクスピア、ゲーテ、ゲオルゲという系譜をたどる形^{ゲシュタルト}姿の詩人論は、ヴォルタースの「人間と属」から最後に引用した一節から明かなように、単なる文芸評論ではなく、文字通り青少年に「模範」を示す教育的機能を果たすことが意図されていた。エロスに根底をおく教育は、男性の師弟間で全人的陶冶を目指して行われる。男性同盟における創造と生殖の意義が強調される半面、超保守的な差別的な女性観が共有されている。

グンドルフとヴォルタースの網領的論文にみられるように、ゲオルゲ・クライスにおいて学問論、芸術論、教育論、近代批判等は、互に関連しつつ全体としてひとまとまりのものとして把握されている。『年鑑』は全体としてひとつの世界観をもつものとして構想され、その世界観を知識層およびその予備軍としての青年層に浸透させることを目的としていた。

『年鑑』には第一次世界大戦直前の保守的青年知識層の思想の一端を見ることができよう。また、特に『第七輪』以降のゲオルゲの著作が、どのような文脈でそのような青年層に受容されていたかを知るためにも、重要と考えられる。